

第8章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 可児

1. シンポジウム概要

テーマ：地域ぐるみの子育て支援をどう進めるか

日時：平成19年1月16日（火）10時00分～15時30分

場所：可児市広見公民館 ゆとりピア「会議室」

参加人数：65人

開催目的：このシンポジウムでは、地域の人たちによる子育て支援活動を広め、活動を活発にするために、地域で子育て支援を取り組み関係者と一般参加者が参加した「私たちはどのような子育て支援ができるのか」に関するワークショップを行い、それを基に、地域特性に応じた地域ぐるみの子育て支援活動のあり方を話し合う。

タイムスケジュール：

10：00～10：10 開会行事

10：00～10：30 ワークショップのねらい

古川芳子（岐阜県総合企画部少子化対策担当次長）

10：30～12：00 ワークショップ どういった子育て支援が必要としているのか
子育て支援でどういった問題があるのか

13：00～13：30 グループ発表

13：30～13：50 事例発表

NPO 法人ファミリーステーション Rin（愛知県日進市）

報告者：牛田由美子（「NPO 法人ファミリーステーション Rin」代表）

子育てサロン（岐阜県可児市）

報告者：中本由美子（可児市主任児童委員代表）

13：50～15：10 全体協議 テーマ：「地域ぐるみの子育て支援をどう進めるか」

パネラー：牛田由美子

中本由美子

コーディネーター：古川芳子

15：10～15：30 まとめ 古川芳子

15：30 閉会



2. ワークショップのねらい

コーディネーターである古川芳子（岐阜県総合企画部少子化対策担当次長）さんから、ワークショップのねらいについてのお話があった。古川さんは、まず、ご自身の子育てや幼稚園教諭・保育士の養成に携わってきた経験をもとに、子育てにおける大切なこととして、「子どもは母子関係だけでは育たない。人様の懐に入れて頂くことは、マイナスということではなく、それは子どもにとっても、親にとっても財産になる」ということを強調されていた。

その理由は、次の2つである。ひとつは、子どもの育ちでは、多様な人々との関係を通じて、多様なマナー、行動様式、表現を獲得し、生きていくための文化を豊かに受け継ぐことが重要

になる。例えば表現方法を受け継ぐとき、若い母親との関係だけでは若い女性の表現に限られてしまうが、異なる世代や異なる性の人々と関わることにより、その子どもは多様な表現の仕方を獲得できるようになる。

もうひとつは、子どもが精神的な安定を保つのは、0歳児でも5人いるという事実である。そして、ひとりの子どもと一緒にいて一番安定できる人物は祖父であったり、隣のおばさんであったり、年上のお姉さんであったりすることもある。また、母親と子どもとの関係は子どもによってひとりずつ異なり、その相性においても「合う、合わない」ということがある。だからこそ、子どもは、母親に限らず、様々な人々との関わりの中で育てることが大切となる。

加えて、古川さんは、いつの時代にも子育てに地域の人々が関わってきたと述べ、今必要とされていることは、子育てを通じた地域の人々の関係を改めて築いていくことではないかと、問題提起をなされた。その関係は、世話をする人と世話をもらう人という固定した関係ではない。お互いにとって大事な人生の出会いであり、子どもにとっても、大人にとっても、それぞれの良い人生をつくっていくことができるつながりである。また、いろいろな人たちに、自分が必要とするときに支えてもらったならば、次には自分ができるときに、その人にまたは、別の人や次の世代の人にその経験を返していくことも大事であると、話された。

こうしたことを踏まえ、最後に、今回のワークショップのねらいとして、子育てやその支援活動における問題や必要性に関する情報交換をすることと、子育て中の人や活動している人たちが実際につながるためには何が必要であるのかを考えることをあげられた。

3. ワークショップ

ワークショップでは、上記の問題提起とねらいを踏まえ、6つのグループに分かれ、1) 子育てしている上でどのような問題にぶつかっているのか、2) どのような子育て支援を必要としているのか、について話し合いが行われた。各グループには、



乳幼児家庭教育学級を受講している母親、主任児童委員、生活学校のメンバー、社会福祉協議会の職員や行政職員が入っている。そのため、様々な立場の人たちがお互いに意見を交換することができたようである。グループワークの結果をまとめたものは、以下のとおりである。

子育てをしている上で、問題となっていることに関しては、複数のグループにおいて、近所に頼れる人がいないことがあげられていた。近所づきあいをどのようにしたらよいのか分からない等、地域の人との関係をつくることの難しさが指摘された。また、近所に頼れる人がいないため、ちょっとした頼みごとをお願いしたり、気軽に相談をしたりする人が見づらくないこともあげられた。子育てサロンやサークル等があっても、事前に聞いた情報と実際が異なっていたり、仲間同士でグループ化されていたりするため、参加しにくいところがある。子育て支援の情報をどこで得たらよいのか分からない、子育ての情報が多すぎるため迷ってしまう、等情報に関する問題点も出された。子育て家庭における経済的な問題が指摘された。これは、学費が高いことや、支援を受けるにしてもお金がかかること等の問題があげられていた。周囲の人がもう少し子育てに関心を持ってほしいという意見も多く見受けられた。子どもをつれていいるときに、少しでも声をかけてもらえると、非常にうれしいといった意見や、交通機関や施設等、子どもを連れていいると利用しにくいところがあるといった指摘もあった。子どもを外に出すことに不安を感じている親が多いのではないかという課題も出されていた。

必要とされている子育て支援に関しては、次の4つに大きく分けられた。子育て中の親同士が情報交換できるような場所がほしい。託児のサポートを充実してほしい。母親の体調が悪いとき、緊急なときに、買い物するとき等、預けられるようなシステムがあるとよい。子育てと仕事の両立できるように、企業も努力してほしい。両立の悩みに対しても理解を示してほしい。情報提供を工夫してほしい。同時に、支援する上での課題として、相談に応じる人の専門性を高めてほしい、ボランティア活動をどのように継続していくことができるのか、他の団体と意見交換できるような場作りが必要ではないか、といったことも指摘された。

4. 事例発表

NPO法人「ファミリーステーション Rin」(報告者：牛田由美子)

日進市では、10年以上前に、子育てをすることの困難さを感じた親たちが、支え合いながら子育てをできるように、自分のことから支援活動を始めたそうである。そのため、2003年ごろには、子育て交流会、親子教室、読み聞かせを開催しているグループや、託児ボランティア、子育てネットワーカー、民生・児童委員や家庭教育推進委員として活動している人など、多くの人々がそれぞれに活動していた。加えて、次世代育成支援推進の行動計画策定等を通じて、市民と行政との関係が築かれ、それぞれの立場を尊重しつつ、協働して子育て支援にあたっていく環境が作られつつあったという。こうした状況の中で、2003年に、行政の働きかけにより様々な活動経験を持った人々が集い、NPO法人「ファミリーステーション Rin」(以下、「Rin」と略す)の設立の準備が行われた。2004年にNPO法人格を取得して以来、幅広い活動を展開してきている。2005年には、民家を借り、事務所兼活動の拠点となる「Rinのおうち」を開設している。現在の主な活動・事業は、「つどいの広場」事業、親子教室・子育て講座の開催、地域交流イベントの開催、相談事業、子育て支援総合コーディネート事業等である。

「Rin」の活動のうち、ここでは「地域の人々との交流」に焦点を当てて紹介したい。「Rin」では、支援活動の中に、地域の人々と交流を取り入れることを大切にしている。その理由のひとつは、地域の人々との交流が母親にとって大きな力になるためである。母親たちが実際に暮らしているのは地域であり、その地域の人々から温かい目で見守られ、「あなたの子育てを応援しています」と伝えられることにより、母親たちが力づけられるからである。そこで、「Rin」は、地域の人々に支援活動に携わってもらうことを通じて、母親たちと地域の人々との関係をつなげていくように心がけているという。もうひとつには、地域の人たちとの交流が、子育て中の親子に豊かな体験を伝える機会になっているためである。現在、親自身が、食・遊びにおける多様な体験や自然との関わりをあまり多く持たずに育ってきたため、子どもにそれらを伝えることが困難な状況にあるという。地域の人たちがもつ知恵や経験を子どもとその親に伝える機会をつくることで、そうした点を補っているそうである。

「子育てサロン」(報告者：中本由美子)

中本さんからは、可児市主任児童委員による「子育てサロン」を立ち上げるに至った背景についてのお話があった。子ども関係の専門とする主任児童委員として、民生委員と連携しながら何をしていくことができるのか。これが主任児童委員を拝命してから考えていたことであったという。主任児童委員の活動経験や様々な研修に参加したことを踏まえ、母親たちが身近にあり、気軽に立ちよれる子育てサロンを一番望んでいると感じたそうである。また、可児市では、児童センターや公民館などで、プログラムつきの様々なイベントが既に行われていた。そ

ここで、主任児童委員での話し合いを通して、プログラムなしで、非会員制で、親子が交流できる場づくりをするのが良いのではないかという意見に落ち着いたという。その結果、桜ヶ丘児童センターに最初のサロンが開催された。毎月の会合のときに、サロンの様子を伝えることで、開催場所が広がっていった。現在、市内7ヵ所でサロンを開催している。7ヵ所のサロンでは、その地区の特徴を活かして、運営がされている。ただ、運営に際して共有していることは、長く続けていくために、無理のないよう開催していくことを心がけるとのことである。また、175名地域にいる民生委員と連携をしながら、活動できることも、運営上、大きなメリットになっていると話された。

5．全体協議

全体協議では、活動を実践するにあたって、苦労した点やそのプロセスで大切にしたい点、行政と関係づくり、の2つについて主に話し合われた。



まず、実践するにあたって、苦労したことに関して、牛田さんは NPO 法人を立ち上げるに際して苦労したことを話された。いろいろな考えを持って子育て支援をしている人々が集まり、法人づくりを行ったため、どのような方針で具体的にどのような活動を行っていくのかに関する合意形成を取っていくことが大変であり、とても時間がかかったという。これらを解決するにあたっては、「子育て支援、やっぱり必要だね」という思いを共有し、そこを合意の着地点にすえるようにしたと述べられた。そのために、一緒に活動している仲間と、自分たちの共通点は何かについて話し合い、確認し合うことを大切にしたいという。中本さんは、民生委員協議会が、既に高齢者のためのサロンを各地区で実施していたことが、主任児童委員が子育てサロンを作りたいと提案し、実施するにあたり、大きな力になったと話された。また、サロンが終わった後に反省会を実施することや、毎月の主任児童委員の例会の際に、お互いに、サロン運営の困ったことや工夫などを情報交換することも大事にしているという。

行政との関係づくりに関して、牛田さんは、次世代育成支援推進行動計画づくりに関わったことが今の行政との関係に影響を与えていると話された。この行動計画をつくる際に、日進市の市民として、子どもたちに何ができるのか、市民のために行政は何ができるのかを行政職員の人と一緒に考え、一致点を見つけることができたという。その経験を通じて、行政が何をし、市民は何をすることができるのかがわかり、行政の担当者が替わっても、「Rin」が NPO 法人として進めていく方向性に大きなぶれを起こすことなく、行政とつきあっていくことが可能になったそうである。

最後に、コーディネーターの古川さんが、「協働」の大切を述べて、まとめられた。それは、お互いに抱えている課題を、肩書きにとらわれず、ひとりの人間として一緒に考え、出てきた結果もまた一緒に考え、次に何ができるのかを見つけていくことである。午前中に行ったワークショップもその大事なプロセスのひとつとして位置づけ、終えられた。

6．シンポジウムの感想

今回のシンポジウムでは、ワークショップが特に好評であった。今、子育てをしている母親たちの声を直接聞くことができたことや、地域で子育て支援活動している他の人たちと情報交換できたことなどが、今後の活動に参考になったようである。